*Bulletin of the Educational Research and Development, Faculty of Education, Kagoshima University*
2022, Vol.31, 152-160

論文

# 「主体的・対話的で深い学び」の実現を目指す小学校外国語の授業づくり
## ー教科書分析と授業実践の分析を通してー

髙味　淳［鹿児島大学教育学系（教職大学院）］
金﨑英俊［鹿児島大学教育学部附属小学校］
福森一真［鹿児島大学教育学部附属小学校］

**Creating Elementary School Foreign Language Lessons Aiming to Facilitate "Proactive, Interactive, and Deep Learning": Through the Analysis of Textbooks and Class Practices**

TAKAMI Jun, KANEZAKI Hidetoshi and FUKUMORI Kazuma

キーワード：小学校外国語授業、「主体的・対話的で深い学び」、教科書分析、コミュニケーション

### 1. 問題の所在

2017 年３月に小学校の新しい学習指導要領が公示され，2020 年度から全面実施されている。今回の改訂のキーワードとして「社会に開かれた教育課程」「カリキュラムマネジメント」「三つの資質・能力」「主体的・対話的で深い学び」などが上げられる。特に，授業においては，子供たちがこれからの社会で活用することができる「三つの資質・能力（知識及び技能，思考力・判断力・表現力等，学びに向かう力･人間性等）」の育成が重要であり，そのために「主体的・対話的で深い学び」の視点からの授業改善が求められている。

折しも，今回の改訂により，小学校外国語活動は第３・４学年，第５・６学年においては教科としての外国語科が実施された。これまで行ってきた外国語活動の成果と課題を踏まえつつ，子供たちが生き生きとコミュニケーションを図ることができる外国語活動・外国語科の授業づくりを行っている。その一方で，教科としての外国語科の授業づくりについて，「教科書に示された文字をどのように扱うか分からない。」「教科書に示された課題を，どのようにして子供が学ぶ必要感をもてるような課題にするのかよく分からない。」といった教科書の活用に悩む声も聞こえてくる。そこで，「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業をつくるために，教科書の活用を主として，これまでの実践等も踏まえながらどのように授業をつくっていくのか明らかにしていきたい。

### 2. 外国語教育における「主体的・対話的で深い学び」の再確認

「主体的・対話的で深い学び」の実現を目指す授業づくりを行うに当たり，まず，外国語教育における「主体的・対話的で深い学び」の定義を見直したい。国が示す「主体的・対話的で深い学び」の定義を把握することで，外国語科における学習指導がより具体的にイメージできるからである。

なお，定義に当たっては「小学校外国語活動・外国語研修ガイドブック」（文部科学省）を引用する。

⑴　「主体的な学び」とは

①　外国語を学んだり，外国語を用いてコミュニケーション行ったりすることに興味や関心をもつこと

②　生涯にわたって外国語によるコミュニケーションを通して社会・世界と関わり，学んだことを生かそうとすることを意識すること

③　コミュニケーションを行う目的・場面・状況等を明確に設定したり理解したりして見通しをもって粘り強く取り組むこと

④　自らの学習やコミュニケーションを振り返り，次の学習につなげること

⑵　「対話的な学び」とは

表面的なやり取りのことではなく，他者を尊重して情報や考えなどを伝え合い，自らの考えを広げたり深めたりすること

⑶　「深い学び」とは

①　コミュニケーションを行う目的・場面・状況等に応じて思考力・判断力・表現力等を発揮する中で，言語の働きや役割に関する理解や外国語の音声，語彙・表現，文法の知識がさらに深まり，それらの知識を聞くこと，読むこと，話すこと，書くことにおいて実際のコミュニケーションで運用する技能がより確実なものとなるようにすること

②　深い理解と確実な技能に支えられて，外国語教育において育まれる「見方・考え方」を働かせて思考力・判断力・表現力等が活用されるようにすること

## 3. 外国語における「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けて

### 3-1　教科書分析

次に，これらの定義を踏まえ，「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業づくりを図るために，教科書を分析し，どのように活用していくのか考えたい。なお，外国語授業づくりを行うにあたり，教科書を分析する大きな理由は次のとおりである。

鹿児島県で採択されている４社の教科書には，外国語教育おける「主体的・対話的で深い学び」の実現をどのように図るか，各教科書に例が示されていない。例えば，算数，道徳といった他教科等については，見開きページや随所で「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けてのポイントが示されているものもある。単元の性質や子供の実態等から，教科書どおりに教えることも当然出てくることもあると考えられるが，どのように学習指導に落とし込んでいくのか分かりにくいといった課題が見られる。特に，教科としての新たにスタートした外国語科において，教師は教科書を拠り所にする状況が予想されるため，複数の教科書を分析し，指導法に結び付けることは外国語授業づくりを充実したものにできると考えたからである。

教科書の分析に当たっては，表のように，鹿児島県の各自治体が採用している４社の教科書を「主体的・対話的で深い学び」の視点から分析する。「主体的・対話的で深い学び」の視点については，

**【表　外国語科における「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた教科書分析】**

| | | A 社 | B 社 | C 社 | D 社 |
|---|---|---|---|---|---|
| | 単元名 | Can you do this？ | He can bake bread well. | He can run fast<br>She can do *kendama*. | She can sing well. |
| 主体的な学び | 子供の興味・関心（扉絵）（課題設定） | イラスト・文字<br>動物・公園<br>プロフィールカードを作ろう | 人形<br>街中<br>身近な人を紹介しよう<br>大単元<br>地域のことを紹介しよう<br>外国から来た人たちに英語で伝えてみよう | イラスト・文字<br>校庭(休み時間)<br>自分や他の人ができることやできないことを紹介することができる | イラスト<br>公園<br>できること，できないことを伝えられるようになろう |
| | 社会・世界とのかかわり（海外とのつながり） | 特になし | 世界の職業 | 世界の小学生ができること | 日本語と英語で似ている音 |
| | 見通し（単元計画） | 特になし | Let’s chant として学習する表現を右上に表示 | Hop step1 step2 jump と細かく設定し右上に表示 | 特になし |
| | 振り返り（Can-do） | 単元末に「ふりかえりをしよう」<br>チェック式 | 巻末に「ふり返ろう」<br>チェック式 | 単元末に「ふりかえろう」<br>チェック式 | それぞれのページに「できたかな？」<br>チェック式<br>単元末に「Looking back」<br>チェック式<br>記述式 |
| 対話的な学び | ゲーム活動<br>アクティビティ | ゲーム活動<br>（各ページに）<br>デジタルコンテンツ(D.C)を聞いて答える<br>友だちと尋ね合う | ゲーム活動<br>D.C.を聞いて答える<br>友だちと尋ね合う<br>絵で書く<br>カードを貼る | ゲーム活動<br>D.C.を聞いて答える<br>友だちと尋ね合う | D.C.を聞いて答える。<br>友だちや先生と尋ね合う<br>絵や日本語で書く |
| 深い学び | 運用技能<br>思考力・判断力・表現等<br>（言語活動） | プロフィールカードを作り，発表しよう | 友達に「身近な人紹介カード」を見せながら，ショー・アンド・テルをしよう | 学校の先生にインタビューして，その先生ができることやできないことについて紹介しましょう | 友だちのできることを書いて，発表しましょう |
| その他 | コミュニケーションの工夫 | 特になし | 見てほしいときは？<br>スピーチを聞いてもらったら？<br>相手の番になったら<br>It’s your turn. | 聞くときに気を付けよう「発表しやすいような温かい雰囲気を作ろう。」 | 特になし |
| | 文字指導 | 巻末にて小文字の形の確認<br>書き写し | 2 頁毎に Sounds and letters 文字の書き取り<br>アクセント<br>書き写し | 2 頁毎に 2 文字<br>書き写し | 単元末に Let’s Read and Write<br>なぞり書き<br>書き写し |
| | ICT の活用<br>※ここではQRコードの活用 | 各頁の Let’s listen が聞けるようになっている | 単元初めに歌,チャンツ，単元終末の言語活動動画 | 単元初めに場面を表す Story，全活動音声付き | 全単元のジングル，単元末文字の音書き順 |

先の定義を踏まえる。なお，４社のウィークポイントを洗い出すという考え方ではなく,「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けて生かせそうなストロングポイントを洗い出すという考え方で整理する（表）。

### 3-2　教科書分析からの考察

単元名に関しては，これまで子供が慣れ親しんでいる英語を簡潔に使用している D 社のものが，子供，教師共にイメージしやすいと考える。A 社は二人称の“you”が使われ当事者意識をもつことができる。C 社に関しては，単元名に文化的要素（日本文化）も入っており，より学びの意欲が喚起される。

#### ⑴　主体的な学びについて

子供の興味・関心をもたせることについては，各社扉絵を工夫している。その単元で学ばせたい表現が使われる場面が見開きで示されている。一方で，教科書会社によって扉絵で示す情報量に差がある。ほとんどの会社が音声で聞いて推測するような活動を設定している。B，D 社が絵のみで示しているのに対して A，C 社は文字も示していた。また，各社が扉絵で，単元で身に付けることを明記しているが，「～のために」といった目的は示されていない。このことは，各学校で実態に応じて，設定できるようにしているからだと考える。

社会・世界とのかかわりについては，B 社のように単元と関わりのある内容で詳しく書かれていると，学習内容と関係付けられてよいと考える。そこで，他教科書においても，学習内容と関係付けて考えられる文化や世界とのかかわりについて教材研究をするとよいと考える。また，B 社は，学期ごとに大きな課題を設定している。１学期は自分のことを紹介しよう，２学期は地域のことを紹介しよう，３学期は日本のことを紹介しようとなっており，徐々に世界を広げていっている。課題の範囲を広げるこの工夫は，子供のものの見方・考え方を深める上でも参考になると考える。

見通しをもつことについては，C 社が，教科書内に細かく明記されている。このことにより，子供，教師共に，単元の見通しを共有できるという点ではよいと考える。ただし，子供が「学びたい」と思えるよう，各学校でカスタマイズする必要があると考える。見通しが明記されていない A，B，D 社については，学校の実態に応じて，目的や場面，状況等を柔軟に設定して，単元計画を作成できるという点に関しては，自由度が高く良いと考える。

振り返りについては，各社単元末にチェック式で示されている。D社のみ記述できる箇所が示されていた。学んだことを書き溜めていくことで，子供は，自分の成長や学びを可視化し，メタ認知することにつながり，教師は子供の知識・技能の定着や，思考した様子を継続的に見取ることができるという点から良いと考える。

#### ⑵　対話的な学びについて

教科書内に設定されているゲーム活動やアクティビティについては，A，B，C 社については，ゲーム活動が随所に設定されている。特にA社は，単元を通してゲーム活動が配置されているため，「単元のこのタイミングで，このようなゲーム活動を取り入れたら良い」という点で，参考になると考える。アクティビティに関しては，各社，デジタルコンテンツを活用して，聞いて答えたり，友だちと尋ね合ったりする活動が設定されている。単に形式的にやり取りをするのではなく，例えば“Me too.”など自分の思いを入れるなど，他者を尊重したり，自分の考えを深めたりする様な工夫をしていきたい。

### ⑶　深い学びについて

深い学びについては，B，C 社が具体的に相手を示している点と，言語活動の形態が示されている点が教科書を扱って授業をする上では扱いやすいと考える。B 社のように「身近な人」とすることで，子供が本当に伝えたい人を選ぶ。「カードを見せてショー・アンド・テルをする」と明記することで，子供が達成する目的が明確化される。C 社にように，「学校の先生」と相手を焦点化することで，子供が本当に聞いてみたい先生にインタビューし，聞いて分かったことを紹介する。このことが，子供の「伝えたい」「聞いてみたい」意欲を高めることにつながる。ただし，B 社は，正確に伝えようと難しくなったり，D 社は，小規模の学校ではインタビューの相手が限定され，目的意識の低いものになったりすることも予想できる。どの教科書会社を扱うにせよ，単元終末の言語活動については，学校の規模や子供の実態をもとに，教師や子供が工夫して設定する必要があると考える。

### ⑷　その他について

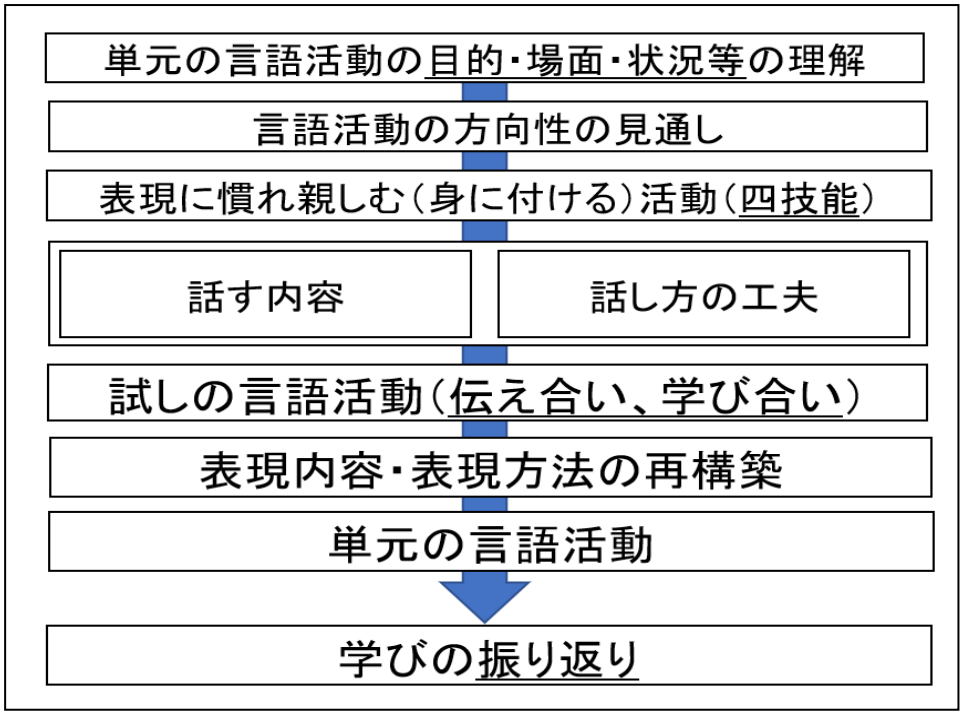
その他として，「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けて次の３つの要素も大切だと考える。

まず，コミュニケーションの工夫（表情・表現の仕方・コミュニケーションをより円滑に進める言葉のやりとりなど）について，B，C 社が示している。B 社は，見てほしいときやスピーチを聞いてもらったときの表現や，次の人に会話をつなぐ言葉，反応する言葉といった，つなぎ言葉を各単元で扱っている。C 社は，「聞くときに気を付けよう」と示し，「発表しやすいような温かい雰囲気を作ろう」と述べている。言葉とコミュニケーションを学ぶ外国語としては，コミュニケーションの工夫について教科書に示されていると扱いやすいと考える。

また，「主体的・対話的で深い学び」の実現をより補完する文字指導に関して，学習指導要領に新たに明記されたアルファベットの音読みを意識した記され方が各社なされている。特に，B，C 社は，各ページの下に１文字ないし２文字示し，毎時間帯で扱うような手立てをとっている。一方，D 社は，単元末に A 社は巻末にまとめて示している。子供の文字への興味を高めたり，学習意欲を維持したりするには，B 社，C 社の教科書の作りを参考にして，毎時間少しずつ扱うと良いと考える。

さらに，ICT の活用に関して（ここでは QR コードについて）は，各社，どの単元においてもチャンツが収録されている。これは，一人一台端末を活用して，子供たち各々が，聞きたい，学びたい表現を選び，QR コードを読み取ることで，いつでも何度でも聞くことができ，個別最適な学びを実現する上で有効であると考える。また，C 社のようにすべての活動が QR コードに記されることで，時間や場所を選ばず外国語を学ぶことができる。このことも，生涯を通して学び続ける，主体的な学習者を育む上で有効であると考える。

「主体的・対話的で深い学び」の実現に向け，４社の教科書を分析してきたが，各社のストロングポイントを生かしながら，よりよい外国語学習指導のヒントにしていきたい。




【図１　外国語活動及び外国語科の単元構造】

### 3-3　授業実践からの分析（令和３年５月実施）

第５学年 She can sing well.（D 社）で，「主体的で対話的で深い学び」を目指した授業実践を行った。

外国語活動や外国語科において，「主体的で対話的で深い学び」を行っていくためには，単元や１単位時間の中で「目的，場面，状況等」を捉える内容，「伝え合い，学び合い」を行う内容などを，教師が図１のように意図的に設定しながら，授業を行っていくことが有効であると考えた（図１）。実践を行っていく中で，教科書に加えて更に捉えさせたい内容がある場合は，教師が意図的に補っていく立場で実践を行った。

なお，本実践では，重点を置いた４つの観点に沿ってまとめることとする。

#### ⑴　言語活動の「目的・相手・状況等」の理解

子供が主体的に学習に取り組んで行くためには，「英語を使ってみたい。」「相手と英語でコミュニケーションを図りたい。」という思いや願いが高まる言語活動の「目的，場面，状況等」を設定する必要性がある。本校が使用している D 社の教科書では，具体的に設定されていない。そのため，本実践では，言語活動の目的，場面，状況等を以下のように設定した。

「目的」･･･鹿児島大学の留学生に日本の小学校について紹介する。

「場面」･･･新型コロナウイルス感染症のためインターネット通信を用いて交流する。

「状況」･･･鹿児島大学の留学生は日本のことをあまり知らない。

このような，「目的，場面，状況等」を設定し単元の導入で捉えさせることで，「留学生に日本の小学校でできることを紹介したい。」「ZOOM を使えば英語を使って交流ができそうだ。やってみたいな。」という，子供たちの思いや願いを高めることができるのではないかと考えた。

### ⑵　「伝え合い，学び合い」の設定

「伝え合い，学び合い」については，子供が実際にコミュニケーションを図る前に試しの活動を行うことで，話す内容や，話し方の工夫について，友達と話し合いながらよりよいものを考える場を設定した。伝え合い，学び合う中で，子供たちは既習の内容も活用することができる。本実践では，話す内容と，話し方の工夫を以下のように設定した。

「話す内容」

Hello. /My name is Sora./This is music room. /We can play the piano and drums.

This is English room. /We can study English. /This is home economics room. /We can cook.

That's all.

「話し方の工夫」

・　ZOOM でのコミュニケーションのため「相手の反応を確認する」。

・　ZOOM でのコミュニケーションのため「理解を問う」。

また，「伝え合い，学び合う」場面においては，必ず子供たちの「思考力，判断力，表現力等」が発揮される。そこで，本実践では，思考方法を以下のように想定した。

「思考方法」

・　モデル文と目的や場面，状況等や，新出の表現を関係付けながら考えを形成する。

・　各グループで形成したモデル文を比較し，必要な話す内容や話し方を選択したり抽出したりする。

「選択する」とは，話す内容について目的，場面，状況等に応じた文を，友達との伝え合い，学び合いから選ぶことである。「抽出する」とは，話す内容に応じて，目的，場面，状況等に応じた単語を抜き出すことである。

### ⑶　「四技能，活用力」

「四技能，活用力」については，D 社の教科書にある「Listen and Guess」「Jingle」「Listen and Do」を活用しながら，「聞く」「話す」「読む」「書く」の習熟を図った。特に「Jingle」に関しては，子供たちが教科書の QR コードを自分のタブレットで読み込んで活用できるようにした。また，「書く」については，必ず HRT（Home Room Teacher）がモデル文を掲示して，それを基に英文を書かせることで，子供たちが自信をもって取り組めるようにした。

### ⑷　「振り返り」の充実

「振り返り」については，D 社の教科書にある「Looking Back」を活用しながら行った。また，「主体的・対話的で深い学び」につながるように，どのような思考方法を用いて，話す内容や話し方の工夫を行ったのかを振り返るようにした。

これら４つの観点を踏まえ，図２のように単元全体を構想する（図２）。

| 過程 | 主な学習活動 | 教師の具体的な働きかけ |
|---|---|---|
| 意欲をもつ | **Ⅰ　単元の計画を立てよう①**　**「目的，場面，状況等」**<br>1　鹿児島大学に留学に来た学生と，インターネット通信を用いて話をする。<br>（留学生の思いや願い）<br>・附属小の子どもたちと仲良くなりたい。<br>・日本の小学校のことを知りたい<br> <br>留学生のことや，どんな学習をしていくのかが分かった。英語で，留学生に日本の小学校のことを紹介したいな。（主体的）<br>2　単元の学習計画について話し合う。<br>留学生に附属小学校のことを発表しよう。 | ○　本単元への意欲を高め，学ぶ必要感を喚起するために，実際に発表する相手である中国からの留学生と，インターネット通信を用いて，互いの自己紹介を含めて英語で会話をし，言語活動の目的や場面，状況等や，相手の思いなどを捉えさせたりする。<br>○　言語活動までの見通しをもたせるために，単元の学習計画を作成し，学習する場面や表現を捉えさせる。 |
| つかむ<br>挑戦する・広げる<br>振り返る・生かす | **Ⅱ　発表に必要な表現を身に付けよう②③④**<br>○　ゲーム活動　**「四技能，活用力」**<br>○　Small talk<br>○　教科書を使った活動<br>「Listen and Guess」「Jingle」「Listen and Do」<br> <br>教科書を中心にゲーム活動をすることで，英語に自信がついたよ。<br>**Ⅲ　発表する内容や方法を考えよう⑤⑥（本時）**<br>○　話す内容の工夫　**「伝え合い，学び合い」**<br>子供たちが形成した話す内容<br>（試しの発表で具体化された留学生の思いや願いを基にした視点）<br>・どんな教室や時間割で，何ができるのか。<br>・日本の子どもたちの名前を正確に知りたい。<br>・情報が多すぎる。精選する必要がある。<br>↓<br>思いや願いと関係付けて再構築された話す内容<br>○　話し方の工夫<br>［A 班の話し方の工夫］<br>・ジェスチャー<br>・写真提示<br>↔<br>［B 班の話し方の工夫］<br>・強調<br>・理解を問う<br>［再構築された A 班の工夫］<br>・ジェスチャー<br>・写真提示<br>・理解を問う<br>［再構築された B 班の工夫］<br>・強調<br>・理解を問う<br>・写真提示<br> <br>友達と話し合うことで，話す内容や話し方がどんどんよくなっていくよ。（対話的）<br>**Ⅳ　発表会をしよう⑦**　**「四技能，活用力」**<br>・　インターネット通信を用いて附属小学校のことについて発表をする。<br>・　発表について留学生から質問を受ける。<br>**Ⅴ　学習を振り返ろう⑧**　**「振り返り」**<br>・　Looking Backを基に感想を書き，次の学習に生かせそうなことについて話し合う。<br>・　どのようにして，話す内容や話し方を工夫したか話し合う。<br> <br>発表することで、英語での紹介の仕方が上手になってきたよ。（深い学び） | ○　助動詞canを用いた英語の表現を理解させるために，聞く活動から話す活動の順でゲーム活動やSmall talkを行い，繰り返し音声に触れさせる。その際，馴染みの薄い語彙については多く取り扱う。<br>○　音声の特徴や語順のきまりを理解させたり，第三者の表し方を気付かせたりするために，発表のモデル文を提示し，動作や表情を加えて読むことで音声と意味の接続を図る。<br>○　話す内容について対話的に考えさせるために，まず，試しの発表を設定する。次に，試しの発表で具体化された留学生の思いや願いを基に，話合いで出た視点と，形成した話す内容を関係付けてペアやグループで話し合わせながら考えさせる。<br>○　話し方の工夫について対話的に考えさせるために，まず，ペアやグループごとに比較する活動を設ける。次に，その差異点の中から，自分たちの班にも必要な工夫を選択させるために，ペアやグループで話し合わせながら考えさせる。<br>○　見いだした話す内容や話し方を用いて，粘り強く，コミュニケーションを図るために，留学生に発表したり質問したりする活動を設定する。<br>○　話す内容や話し方の工夫の有用性を実感させたり，達成感を味わわせたりするために，留学生から感想を聞いたり，子供たち同士で感想を交流したりする場を設定する。 |

**【図２　単元「She can sing well.」の指導計画（全８時間）】**

指導計画を基に，実践を進めることで，次のような子供の姿が見られた。

- 「目的，場面，状況等」を単元の導入で伝えることで，単元を通して主体的に学習に取り組もうとする姿
- 試しの活動の後に「伝え合い，学び合い」の場を設定することで，友達と対話的に話し合いながら，思考方法を発揮しながら，話す方法や話し方の工夫について考える姿
- 教科書を活用した「四技能，活用力」の向上を図ることで，休み時間にもタブレットを使って Jinjgle をするなど主体的に学習したり，言語活動の中で活用しようとしたりする姿
- 教科書「Looking Back」を活用した「振り返り」の場を設定することで，自分たちの思考方法を含めた学びを振り返り，今後の単元でも活用していこうとする姿

このような子供の姿から，「主体的で対話的で深い学び」を実現するには，前項で述べたとおり，「目的，場面，状況等」「伝え合い，学び合い」「四技能，活用力」「振り返り」の４つの観点に沿った内容を設定することは有効であったと考える。一方，「目的，場面，状況等」や「伝え合い，学び合い」については，E 社以外の教科書も参考にしながら授業を行っていく必要がある。

## 4. 今後の方向性　－結びにかえて－

今回，外国語における「主体的・対話的で深い学び」の視点から教科書分析と授業実践の分析を行うことで，次のような方向性が明らかになってきた。

- 各教科書会社で取り扱っている，語彙や表現，文化的内容を比較し，時期や内容の系統性を明確にする。
- 教科書会社にかかわらず，汎用的に実践できる，各単元における言語活動を設定する。
- 今後，教科書を使った実践が増えてくることが考えられる。同様の語彙や表現を扱う単元での教科書会社ごと実践を比較し，共通点や差異点を示すことで，教科書を活用するメリット等を明らかにしていくことができると考える。
- 次回の教科書改訂の際に，教科書の新旧を比較し，各教科書会社でどのような変更がなされたかについて着目し，変更点を重視した授業の在り方を検討していく。
- 外国語授業における，デジタルコンテンツや，タブレット端末等の有効な活用方法を明らかにする。

今後も，子供が外国語における「主体的・対話的で深い学び」を実現していくことができるような外国語授業づくりを追求していきたい。

## 5. 参考文献

白井恭弘（2012）英語教師のための第二言語習得論入門　大修館書店

文部科学省（2017）小学校外国語活動・外国語研修ガイドブック

文部科学省（2017）小学校学習指導要領解説　外国語活動・外国語編　東洋館出版社